水産生産の維持增進の爲めの科學振興

水産試驗場技師
理學博士　宇田道隆

水産界に於ては事變以來資材の入手難と徵集その他による從業人員船舶の減少は急速なる生産遞減を數字の上に立證してをり、輸出方面への深刻なる影響と相俟つて非常な困難に際會してゐる。

今や國を擧げて科學振興に懸命な努力が傾けられてをり、物資不足を超克して高度國防國家の要請する增産のためには科學技術の普及振興こそ最大の方策として取り上げられてゐる。斯かる時水産界に於てこそ眞に覺醒し、緊褌一番積弊を一掃して科學的增産に力を盡さねばならぬ事情におかれてゐるのである。

從來水産には生産額、漁民、漁船數、輸出高等の世界第一を誇るものは多かつたが、實の處内容甚だ空虛で、科學的基礎のない、恰も浮草のやうに、ただ世界の景氣に伴つて一上一下する、其の日暮しの觀があつた。水産科學の振興などゝは誰の世迷言とばかり面を振り向けもしない傾向であつた。

だが駸々たる時潮に、遲蒔ならも水産界にも漸くにして「科學性を獲得せよ」、「科學的計畫生産へ」との聲が高まるやうになつて、水産が正しい軌道に乘ろうとする氣運に向つて來たことは寔に喜ばしい次第である。

これまでの水産技術は先祖傳來の優秀なる技能を除けば、多く海外のものの燒直しで、偶々國産のものは所謂水産畑以外の國内研究機關の發明を模倣したもので、餘りに物眞似が多過ぎた。このことは何も水産に限らず日本國内の明治以來の大勢であつたが、特に水産界では科學的水準が餘りにも低かつたため目立つてゐるのである。

更に封建時代の日本全般にみられた父子相傳的祕傳祕法の類の祕密主義が水産界に未だに殘存し、殊に民間に多いため著しく發展を阻害してゐる。例へば漁場の祕密や不正

ため著しく發展を阻害してゐる。例へば漁場の祕密や不正通信など今後は絶對にやめて、國家的見地から營利觀念を棄てゝ技術公開に努むべきである。

斯樣に謂はば科學的に開化以前の狀態に拘らず問題が起れば一時的便法に當面を糊塗するのみで、偶々眞面目な研究者が現はれても却つてこれを迂愚扱ひにして抑壓萎靡せしめる有樣が隨處に見られた。

科學技術に對する理解の淺薄は延いて目前の利にのみ囚はれ、直ちに利を見ざるは無用に近しとの短見から眞に水産に於ける基礎的な科學技術の尊重を缺き、結局自ら求めて獨創的な大發見發明により水産の根幹を培ふにとを出來ないやうにしたのが通弊ではなかつたであらうか。就中遺憾なるは私的の利害に眩惑せられ、廿年、卅年乃至は百年といふ長計に立つて水産日本を推し進める用意が足りないものが尠なくなかつたと思はれることである。

老大英國が今日の海上に築き上げた地位の歴史的足跡を見よ。新興獨逸や米國の遠大な計畫を見よ。純學術的とのみ見られる仕事に何年も巨船を裝備して世界の海洋を精査せしめてゐる。歐洲大戰後窮乏のどん底に落ちた獨逸がその立て直しの第一歩を大西洋の大調査から始めてゐる。碁の下手が一隅の目を爭ふに心を奪れてゐるうち、名人は大局の要所要所に石を布き、一盤終つてやつと下手は其の石の眞意に氣付くのと似てゐるではないか。

窮して路漸く通ず。水産科學に對する眞の理解を先づ深め、水産の研究には一時的のものと恒久的のものとあることを明かに認識し科學的研究心を今こそ全水産人の心魂に横溢せしめなければならぬ。「海に科學せよ」とは自ら水産科學を實踐躬行することを念とし、鵜呑みを排してすべてを合理的に、學理の基礎ある常識を培養し、高揚する事である。空虛な形式論者や三百代言式の人物が消えて著實眞劍な科學人が明日の水産興隆にその熱意を注ぐべきである。

これまでの水産學者、技術者と稱せられる人々自身にも骨折つて獨創的な研鑽に沒頭するといふ精神が稀薄で、場當り式のものを狙ふものが多く、少しく地位が昇れば安易な事務にのみ日を暮し、榮達保身の術に腐心するのが多かつた觀がある。それは結局前述の如く環境の無理解と不當な待遇から出發してゐるけれども當人達にも科學技術の研鑽といふ本來の使命を充分自覺して、三昧境に入るまで沒

頭するといふ氣魄氣慨に乏しかつたせいも多少はあるであらう。

沿岸内灣などに於ける或る種類の魚類其のものの減少は病氣に例をとると慢性病か結核のやうなもので、侵潤久しきに及んで魚體は小さくなる、魚は減つたで急に對策を立てやうとしても策の施こしやうがない。大抵の場合魚が著減してから考へはじめるのがこれまでのやり方であつたがこれなども、其の研究に關心を寄せて本當に默々と平素から努力してゐる人が少く、偶々やらうといふ篤志家がゐても在來の資料が不完全で、新たな蒐集の便宜は與へられぬ有樣に頓挫した。吾々お互に猛省すべきは、目前のことしか理解せうとせぬ近眼の爲政者、豫算さへとれば能事了れりとする無責任な技術者、外國の模倣から一歩も出ない不勉强な學者、我利のみ圖る民間人がないかといふことである。

水産の維持と增進の方途は一に科學技術の正しい積極的な活動に俟たねばならず、それには水産に卽した基礎的な物理、化學、生物學の研究を大いに深く堀り下げて行かねばならず、行かしめねばならぬのである。研究の熱意を持ち合さぬ間に合せや拾ひ物に日を暮す技術者の行塞りは當然のことである。

地下資源への物理探鑛法と同じく、海洋資源の科學的發掘方法が眞劍に討議され、試驗されねばならない。海洋調査は淺海、深海の漁撈、養殖を通じその基礎をなすものであり、加工製造の原料に計畫的數字を與へるものである。

先達或る地方で漁業者が集つて、物資不足を克服し本年度の科學的增產方法を協議する會が催され、筆者は招れて其席に列したが、何れも海上第一線に働く漁業家で、日本水產の中堅となる人々であるが、其席上お互ひに眞摯熱烈に職域奉公の誠を吐露して、本年如何に多數の漁船が一團となつて緊密なる連繫を無線電信其他により取り合つて、海洋調査による搜魚、試漁、中心漁場發見、漁況豫知等能率的團體漁法を果し得るかを夕食時も忘れて全く暗くなるまで討議し合つた。自分はその時痛感した。この漁業に直面する人たちの科學的漁法への熱意のうちにこそ吾々の新日本水產への眞の希望を見出し得ると。

水產科學の研究自體は深く遠く事象の根本理まで探究せねばならぬが、獲られた成果は實際と結び付いて眞に業界を稗益し、日本水產の高い指針となるものでなければならぬ。この爲には科學する精神に充溢した人々が實際問題に組打してゆき、一方ではこれを奬勵し、援助することに萬學會にしても派閥的偏見のためか業界こぞつて協贊の風に乏しく外見的に振はず他工業部門に比しては一層見劣りが

ぬ。この爲には科學する精神に充溢した人々が實際問題に組打してゆき、一方ではこれを奬勵し、援助することに萬全を盡さねばならない。

水産科學の振興には水産教育の革新と振興、水産研究機關の充實せる活動とが相伴ふ必要がある。近時水産高等教育の學部が全國諸方に新設せられ、前途に大いなる曙光を與へるものであるが、更にこれには水産教育の內容に深みを持たし且統一を全からしめんことを望むものである。特に水産に卽した物理、化學、生物學の基礎學科を重視することが望まれる。

これまでの水産教育の水準の低さは現在の一般水産人の通弊に結びついてゐる。會社あたりで使ひよいといふ資本家の要求に仰合して、技術の枝葉に走り、當世間に合せの近眼的人物のみ養成するに急であつては世界漁業としての將來の日本水産に對處出來る公明正大な、著實にして研究的な人物は生れ難いであらう。

農、蠶、畜、林産等の農林他部門に對比して平素考へることは水産の方は活氣があるが甚はだまとまりが惡く、著實な氣風に乏しいのではないかといふことである。例へば學會にしても派閥的偏見のためか業界こぞつて協贊の風に乏しく外見的に振はず他工業部門に比しては一層見劣りがする。又行政と試驗研究機關との聯繫にしても他部門に比し申し上げやうのない點があり、水産局、中央水試、地方水試、地方水産課などの關係にも大いに檢討すべきものがありはせぬかと思ふ。農務局、農試あたりに色々學ぶべき點はないであらうか。行政機關でも研究調査の必要はあるのであるが、全き計畫と連絡が缺けてはならない。海洋調査の立場で見ても全日本の水産の官廳所屬船に一貫する連絡組織が出來てをれば今よりずつと能率のよい調査が出來るやうに考へる。

水産教育機關と水産研究調査機關との連繫にしても亦檢討すべきものがあらう。過渡期に於ける事情は諒察出來るが、やはり農林他部門の狀況も參照して考究し、日本水産の立場から見直して正道に置きたいものである。

民間に科學技術を如何に滲透せしむべきか。それは官民の結び付きが完全であり、共に相携へて「海に科學する」心だにあれば容易に解決出來るのであつて、然らざれば百日の說法何の效もない。篤漁家の表彰、褒賞、技術公開の

慫慂と其の補償による奬勵なども取り上げられ、漁業暦のやうな有益な手引も各部門別に編みたいものである。試驗研究を徹底さすことによる指導と協動、業界の經驗知識と要望を懇談的にまとめるやうに進めて行く隣組常會の必要が生れて來ると思はれる。

水産科學技術の新體制は積弊蟠かまり牢固として拔き難く見えるものを官民心を新たにして滅私奉公の大精神のもとに拂拭し去らねば成るものではない。これなくして形式的の呼號、粉飾をなすも何んの新體制があらうか。

水産試驗研究機關を全國一貫して今日の氣象臺に於ける組織網の如くにし地方水試を中央化し、各縣水試は現在の統治區分と從來の自然發生的事情に應じてなるべく存置する一方、各海區を統べる水試を置き、それを一括する國立中央水試を置き、人事、事業豫算の一元化を圖ることが肝心ではあるまいか。海洋調査に對しては豫ねて最も强く全國府縣より國庫負擔を要望されてゐるのであり、海が一續きで陸上の土性、土質、氣象、生産狀態を調べると同じ仕事を海でするものであるから是非早く實現して欲しいと望むものである。

現在各縣試驗船は收入豫算に禍ひされて本當の使命がお留守の觀あることは最早周知の事柄でありながら未だ何等改められてゐないのは不思議である。又試驗研究の任に當る有能な技術者が「これではまるで生殺しだ」と歎いて續々他に轉職する有樣が見られてゐる。

改革には費用の支出を要するからと悛巡して百年河淸を待つてゐては水産は衰微顚落の一途を辿る外はない。

水産のこれまで好き特長は進取的なことであり、從來の發展はこれに基いてゐる。退嬰保守に陷ることを打破し、事大思想を一掃することにこそ明日の明朗な水産が建設されるもとがある。

繰り返していふ。水産人が一個の公明な日本人として、日本の水産のためといふ大きな眼から萬事を判斷して行くことにこそ水産の維持增進に對する要目がろり、それの實現には海に科學する心を持つべきである。

以上編輯者の問に答へるに雜駁粗漏の言があつても、筆者はたゞ日本水産の眞に健やかなる發展　祈る一念に發してかなり卒直に感想をのべたものであるから其の主旨を諒として寛恕せられたい。

（昭和十六年五月十一日深夜九州西海上にて）